

「家族応援プロジェクト 2018 in 宮古」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

2018年11月2日(金)～11月6日(火)、社会福祉法人若竹会と宮古市社会福祉協議会の共催を得て、宮古市魚菜市場にて家族漫画展、11月3日(土)、イートピアみやこ市民交流センターにて家族漫画展と「団士郎漫画トーク」「ふるさとの歌や物語を楽しもう」「アートで遊ぼう」「支援者支援セミナー」のプログラムを実施しました。

10月1日にオープンしたばかりというイートピアみやこ市民交流会館は、本庁舎と保健センターも一緒になった総合施設で、駅に隣接しアクセスもよく、全館に光が入り、街を眺望できるガラス張りの作りに、地元の木材を使ったテーブルや椅子など暖かく親しみやすい空間となっていました。漫画展示も美しく、多くの方の眼に触れたのではないかと思います。1階にある防災プラザでは、過去の災害の歴史展示、東日本大震災と復興、津波石、ビデオなど充実した資料が揃えてありました。

3日のプログラムはお馴染み団士郎「漫画トーク」、「アートで遊ぼう」では、若竹会さんのリードで達磨づくりや塗り絵、「ふるさとの歌や物語を楽しもう」では、NPO法人輝きの和による絵本と紙芝居、鶴野祐介による伝承手遊びを楽しみました。暖かく心地よい空間で、小さい子どもからお年寄りまで一緒になって楽しいひと時をすごしました。院生スタッフに留学生もいたことから、英語や中国語バージョンも取り入れ、国際色豊かな手遊びとなりました。支援者支援セミナーでは、今年も地元の支援者に事例を提供してもらい、「家族造形法」で事例検討を行いました。たくさんの登場人物がいましたので、多くの方々に身体を使って考えるという体験をしてもらえたのではないかと思います。また協働の体験にもなったことでしょう。

「ふるさとの歌や物語を楽しもう」





「アートで遊ぼう」







アンケートでは、たくさんの声を頂きました。「昭和7年洪水、戦前、戦後、平成と生きてきて、子どもの頃の苦しい生活を思い出し、感動しました」（70代以上、男性）、「10年、もう終わりなのですね。それ以降はないのかな？とはいえ、私も宮古を出てしまったので・・・。1年に1度、お話を伺えることを楽しみにしています。また来年お会いできますように」（50代女性）、「最初に宮古にいらした時よりお話を聞かせて頂いています。いつもありがとうございます」（60代女性）、「人見知りの子どもたちの対応大変だったと思います。子どもたちは、『とてもうれしかった』と話しております。私も元気（ほめてくださり）、楽しい時間をありがとうございました」（30代女性）など。

4日は、田老の学ぶ防災に参加しました。今回は、プログラム終了後、田老で被災し、現在も田老に暮らすイーストピアの齊藤清志さんのお話を聞かせて頂いたので、田老の風景がまた違って見え、貴重な体験となりました。ガイドの佐々木さんはいつも大歓迎してくださるので、私たちも「また帰ってきたんだなあ」と懐かしく嬉しい気持ちになります。佐々木さんの語りは毎年変化しており、ガイドとして良いお仕事をされているのだなあと感じます。今年は、6月に大槌に新しくできた市民交流センターおしゃっちを訪ね、語り部ツアーにも参加しました。そして最後は、これも恒例となった遠野の大平悦子さんの古民家を訪ね、囲炉裏を囲んで、手作りの「けいらん」を頂きながら、お話を聞かせて頂きました。怖い話に面白い話、おおいに楽しませて頂きました。少しずつ街が復興していく様子を見ながら、8年という時間の流れを感じています。

今年は魚菜市场とイーストピアみやこの二会場で、パネル展と掛軸展を開催。それぞれらしい展示。魚菜市场とのご縁は市場の閉鎖と共に、今年いっぱいということらしい。

イーストピアの一階市民交流センターに、展示用パネル板が常備され、外からも見通せる共有スペースは、広く天井も高く明るい空間。

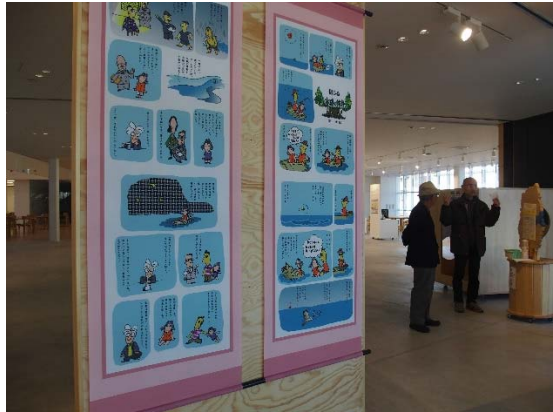
会場に詰めていると、橋本館長さんが話しかけてこられた。思いがけず展示物が充実して嬉しいとのこと。夕刻から照明をつけた掛軸展示がいつそう映えると喜んで下さる。今後の展示継続、発展のきっかけになっていると良い。ハコ物を整備しても、なかなかソフトの充実は難しい公共施設はどこも同じだろう。

パネル漫画展と公共施設の出会いは、双方に利益のあるマッチングになると思うが、なかなか伸びていってこない現実もある。とはいいながらも現状は、結構な数の会場で漫画展が開催されるようになっている。上手くマネジメントして貰って、いろんな場での開催が増えるのは、プロジェクト本来の趣旨にかなったものだ。

「魚菜市场漫画展」



「イーストピアみやこ漫画展」



10月31日に岩手県社会福祉大会（盛岡）で講演したときに聞いたといって、来場されたかたがあった。

会場に座っていると、「今年も来ました」と語る方。盛岡からいらしてるようで、ノートに感想を述べ、来年も又、来ますと語って帰られる。

イーストピアのすぐ近く、地域の中学校で障害のある生徒の教員をしているという方。朝立ち寄って小冊子を貰って、昼食時に読んでいて、何これと思い、掛軸漫画を見るために再度やってきたという。他にも読ませてあげたい人が居るとおっしゃるので、三冊差し上げる。

「8冊目なんですね、これは何なのですか？」と問われたので、経過や、作品のことを話す。障害のある子の事も出てきますね。いろいろ考えさせられることが・・・と。

宮古で6年くらい続けているというと、まったく知らなかったと驚かれる。来年も同じ時期に来ますと伝える。見送られて帰路、「今から魚菜市場に行ってみます」と言って帰られた。

漫画トーク「木陰の物語の物語」は多賀城市に引き続いて漫画「駅」と家族のマネージメント機能についての話。毎回、同じ話にはならない。地元の人に集まって貰うのがなかなか難しいのはいずこも同じだ。かといってPR、PRと、ひたすら集客に翔のも違う気がして。聞いて貰いたい人に届く仕組みはどうすれば作れるのか、難しいテーマだ。

「漫画トーク」





宮古 2018 レポート

文学部教授 鵜野祐介

—— 今回は日記風にしてみました。つれづれなるままにしたためているので、関心の持てない箇所は適当に読み飛ばして下さい。

11月2日（金）

花巻空港に11時50分に到着。空港バスで盛岡へ行き、昼食は盛岡駅地下の食堂街で「スープじゃじゃ麺＋ネギご飯」（860円？）を食べる。ネギやモヤシの代わりに刻みきゅうり入りの塩味うどん麺と、甘だれをかけた白ご飯の上に刻み白ネギを載せた小井のセットメニュー。個人的には、去年食べたスープなしのじゃじゃ麺よりもこちらの方が好き。

13時45分発の急行バスで宮古へ。今年は例年に比べて紅葉が遅いようで、まだ見頃には至っていないが、それでも♪秋の夕日に～照る山もみじ～♪を楽しめた。冠雪した早池峰山や岩手山が空の青にくっきりと映えていた。この日は暖かく、関西とそれほど変わらない。

16時過ぎに宮古駅前に到着し、ホテルのチェックインを済ませた後、魚菜市場とイーストピアを下見。17時にはもうすっかり日が暮れていた。閉店前の魚菜市場は、客も店員もまばら。魚の匂いの中、漫画展パネルを確認。この雰囲気、個人的には気に入っている。足を止めて観ていく人もチラホラと。

一方のイーストピアは、JRと三陸鉄道の宮古駅の裏手に今年10月オープンしたばかりの建物で、木目を生かした瀟洒なホールに、漫画展の掛軸が展示されていた。魚菜市場とは対照的だが、ここもまたいい雰囲気。ホールの一画には「震災と津波のコーナー」があり、映像資料も見学できた。「つなみ」と題する紙芝居の複製も展示されていた。これは20年ほど前に田老地区の女性・田畑よしさんによって作られた手作り

紙芝居で、昭和三陸大津波の体験を描いている。こういう作品を、本プロジェクトを通して作れたらと思う。

18時から「よし寿司」にて、立命からの参加者全員で夕食。毎年恒例の「にぎりずし定食」に「男山」熱燗二合しめて3,800円。寿司も酒も旨い！ 今回の宮古プロジェクトには院生7名が参加しており、内訳も中国と台湾からの留学生各1名、作業療法士、SSW、国境なき医師団に参加していた看護師、ダンサー、と多士済々。

11月3日（土）

7時起床。快晴。朝食後、魚菜市場へ。中央スペースの野菜売り場におばちゃんたちが数人、腰を下ろしてお客さんと賑やかにおしゃべりしながら野菜を売っていた。昨晩よりは客も多かったが、空き店舗の数が昨年よりも一段と増えているのが気になる。近いうちにリニューアルされるとのこと。この素朴な「市場」の雰囲気を残しつつ、新しい風をうまく取り込んでほしい。

9時、会場のイーストピア宮古に到着し、「すきっぷ」のスタッフの皆さんとミーティング。10時から団さんの漫画トーク。筆者は、会場となった会議室の外で誘導・勧誘。

昼食は跨線橋を越えた駅前の店「すみよし」にてカキフライ定食(1,200円)を戴く。大ぶりでアツアツ・ジューシー。関西で出回っている広島産の牡蠣とは種類が違って形が丸いのだそう。おススメです。この店の「タラフライ定食」も人気メニューとのこと。要はイギリスの「フィッシュ・アンド・チップス」のフィッシュの味か。来年はぜひ試したい。

13時30分から、「輝きの和」の須賀原さん・高坂さんと事前ミーティングを行い、14時からワークショップ「ふるさとの歌や物語を楽しもう」を実施。＜プログラム＞は以下の通り。①手遊び「大きな栗の木の下で」（鶴野）、②絵本「しりとるべんとう」（高坂）、③手遊び「一、二、三」（鶴野）、④紙芝居「どんぐりとやまねこ」（高坂）、⑤手遊び「あんたがたどこさ」（鶴野）、⑥絵本「もうちょっともうちょっ」と」（高坂）、⑦手遊び「もちっこやいて」（鶴野）、⑧紙芝居「しろこ地蔵」（須賀原）、⑨手遊び「焼きいもグッチッパー」「さよならあんころもち」（鶴野）、14時45分終了。

参加者には幼児や知的障害者の方がたも多かったので、飽きが来ないように、また集中を切らさないよう、絵本や紙芝居のよみ語り1本ずつを手遊び唄で挟みこむことにし、手遊びは筆者が担当した。結果的にはこの形を取ってよかったと思う。但し、「ふるさとの歌」と題しておきながら地元宮古や岩手の歌を1曲も入れなかったのは反省点。大きな紙に歌詞を書いておき、これを掲示して、岩手の子守唄やわらべうたと一緒に歌うというふうにしてもよかったかもしれない。

1つ目の紙芝居は岩手にちなんだ宮沢賢治作品、2つ目の「しろこ地蔵」は宮古の民話を尾林星さんが脚色・画を手掛けた手作り作品で、去年の本プロジェクトでは尾

林さんが演じたが、今回彼が別のイベントに出席しなければならなかったため、代わりに彼の奥様の母親（つまり義理の母親）である須賀原チエ子さんが演じて下さった。紙芝居には舞台（木の枠）があった方がいい、また手作りの場合の紙は通常の画用紙よりも分厚い金剛紙が望ましい、などの気になる点もあったが、観客をひきつける力が紙芝居にあることを再認識する。

14 時 50 分より、他のメンバーが支援者支援セミナーを行なっている間、須賀原さん・高坂さんと次年度に向けての打ち合わせ。民話紙芝居を作る企画をこちらから提案したところ、1 年かけて 3 作品（「しろこ地蔵」「津波から逃げのびた母子」「津軽石川のサケ」）を作りたいとの須賀原さんの同意を得る。また、今後尾林さんと直接やりとりして進めて行くことを須賀原さんと確認。

16 時 45 分より、現在は市役所の企画部復興推進課に務めておられ、震災前から田老地区に住んでおられる齊藤清志さんに、震災直後から今日までの話を全員で伺う。避難所生活が 3 か月つづき、まわりが次々と仮設に引っ越す中で、市の職員であることから避難所に残るよう指示された時に一番ストレスを感じたという。齊藤さんの意見として、防潮堤は必要。第二防潮堤は壊れたけれど、それによって亡くなった人は少ない。むしろ第一防潮堤の内側にいた人たちの方が、逃げなかったために大勢亡くなったとのこと。また、幼稚園児や高齢の方を山へ引き上げた中学 3 年生の多くが、普段は「やんちゃな子」だったというエピソードも面白かった。高台の復興住宅地に移転された現在まで、文字通り「公僕」として震災後の 7 年半を生きてこられた方の貴重な証言が聞けた。

18 時 15 分より、創作料理の店「楽菜」にて、地元スタッフの皆さんとの懇親会。お忙しい中、本プロジェクトの企画・準備を進めて下さり、当日もこうして我々を気持ちよく迎えて下さる、鷺田さんをはじめとする地元スタッフの皆さんには本当に感謝の思いで一杯。どんこのから揚げ、イカとズッキーニのマリネ、かきグラタン、清酒「男山」の生貯蔵酒等々、どれも美味しかった。この店の手配をして下さり、ご主人と幼い娘さんと参加しておられた、すきつぶの白間さんに感謝。

11 月 4 日（日）

7 時起床、7 時 20 分から朝食、いろいろな野菜がたっぷり摂れ、クリーミーな岩泉ヨーグルトが美味しい。これで 800 円は割安。9 時ホテル出発、

9 時 30 分～11 時、田老にて「学ぶ防災」に参加。今回が 4 回目となるが、今年も佐々木純子さんに案内をしていただく。いつも最初に立命館大学の学生・教職員との縁について、感謝の気持ちとともに語って下さる。有難いこと。第一防潮堤の上に立つ。この日は快晴で、風も弱く波も穏やか。海との間にそびえ立つ、高さ 14 メートル（？）の第三防潮堤の工事が進み、1 年前とはまた景色が違っていた。田老観光ホテルに向

かう途中、川を遡上しようとする鮭の群を目撃することができた。壮観。

観光ホテル6階にて、社長さん撮影のビデオを観る。逃げ遅れたおばあさん、消防車で避難を呼びかけて回り、この後津波にさらわれた消防士さん、何度観ても息が詰まり胸が痛む。この映像をこの場所で観ることが、防災・減災のための一番の方法と言う佐々木さんの意見に同感。11時30分出発。

12時から、大槌町浪板海岸の「さんずろ家」にて昼食。蒸しウニ丼定食（950円＋税）、この値段でこの旨さ、太平洋を一望できる見晴らしのよさ、そして、何と云っても注文から配膳までの早さ！　ちなみにジャンボ・タクシーの運転手さん曰く、いかめし定食がオススメとのこと。是非ともまた来なければ！

12時30分、大槌町旧庁舎遺構前で「語り部ツアー」の男性ガイドと落ち合い、14時過ぎまで案内していただく。このガイドの方は旧庁舎の近くにあったご自宅を津波で失くし、現在は旧自宅の近くに新たな住居を構え、町内会長をしておられるとのこと、行く先々で呼び止められ、またこちらからも声掛けをする、顔の広い70代ぐらいの方だった。過ぎ去ったことに対してくよくよせず、朗らかに、ポジティブに生きていこうとする姿勢が前面に現われていた。大槌町の復旧・復興をめぐる2つの懸案事項、旧庁舎の解体と防潮堤の建設に関するこのガイドさんの意見をまとめておくと、まず旧庁舎の解体については、老朽化のため震災前から取り壊しが計画されていた建物だったこともあり、解体に賛成とおっしゃった。一方、自宅から海が見えなくなる防潮堤には反対で、住宅地をかさ上げしたり、住宅を高台移転させたりして海が見える住まいにすべきと強調され、漁師が多い同町赤浜地区の住民は実際にそうしているとも話された。

14時30分に大槌町を出発して、釜石から自動車道に乗り、仙人峠のトンネルを抜けて遠野へ。途中の山並みの紅葉が入日に照らされてとてもきれいだった。15時30分頃、遠野市青笹の大平悦子さん宅に到着。ご主人と一緒に笑顔で出迎えてくださる。大平さん宅への訪問は今回で3回目となるが、いつも古民家の囲炉裏端で悦子さん手作りの甘味と果物に舌鼓を打ち、囲炉裏の煙に燻されながら、遠野の昔語りを聴かせていただくという贅沢なひとときを過ごしている。今回は「けいらん（鶏卵?）」という、餡を白玉粉で包んだ団子にお湯をかけた、ぜんざいに似た甘味をはじめて戴き、体が温まったところで昔語りが始まった。

演目は次の通り。①「しらみの質入れ」、②「にせ本尊」、③「河童の手紙（水の神の文使い）」、④『遠野物語』97話（臨死体験）、⑤「正月の歌褒め」、⑥「頭が池」。小1時間たつぷりと聴かせていただく。遠野の土地言葉（方言）を聞き慣れていない者にも理解できるよう、要所要所に標準語での説明を挟んで語って下さるのがありがたい。笑い話を基調にしながら、怖い話（③）や死と再生に関係する話（④）を挟み込んでド

キッとさせ、最後に落語のネタとしても有名なナンセンス爆笑譚でサゲを落とすという絶妙のプログラムだった。

このようなく語る－聴く＞時空間が、聴き手にとってのみならず語り手にとっても、生き生きと生きていくための力を受け取る場となっていることを改めて実感するとともに、この力の意義を広くアピールすることが本プロジェクトの今後の重要な取り組みとなることを再認識した。

多賀城に続いて、宮古～大槌～遠野でも、これまでの 8 年を踏まえてこれから進んでいくべき方向性が、理念としてのみならず具体的な方策として見えてきた。その手ごたえを感じて 3 日間の旅を終えた。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 宮古」に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 宮治 智行

宮古に到着後、魚菜市場のフィールドワークに出かけた。道中、小学校の近くを通った際に津波シェルターの看板を見つけた。少し海から離れたこの地域にも津波シェルターがあることに驚き津波被害の大きさを思い知らされた。

「団士郎家族漫画展」の会場は去年に引き続き魚菜市場で開催されている。魚菜市場で働く地域住民の中に漫画展が驚くほどに溶け込んでおり、このプロジェクトが宮古市民に受け入れられているように感じた。

次に今年の 10 月にオープンした地域防災拠点施設イーストピアみやこへ足を運んだ。1 階にある防災プラザは東日本大震災の経験や教訓、復興の経過、過去の災害の歴史などを紹介している。中でも災害が起こった時に被害を最小化するための取り組みや対策などの展示物が印象的であり、津波被害から学んだことを教訓に防災、減災に力を入れて取り組まれていた。宮古市は東日本大震災を乗り越え復興の時期から発展の時期を迎えている。

浄土ヶ浜へ向かう途中、タクシーの運転手さんに宮古市内には津波がこの高さまで来たことを記す標識が至るところに設置されていることを教えていただいた。津波の標識は日々の生活の中でも常に津波に対する警戒が薄れていかないようにするための作用を持つ。

最終日、宮古市田老地区で「学ぶ防災」に参加した。ガイドの Sさんは初めてガイドを務めたのも立命館大学であったと話された。震災から 7 年の時を経て被災と復興を通してのつながりができていると感じた。7 年半経っても忘れないでいてくれることに感謝していると話されたことが印象的であった。宮古市の現状や復興の経過を知ろうとする姿勢、つながりを持ち続け震災を風化させないことなど支援の形は様々で

ある。

今回のプロジェクトの最後に「遠野物語」の語り部である〇さんのお宅を訪れた。「遠野物語」とは岩手県の遠野地方に古くから伝わる言い伝えや民話などを記した説話集であり、当時の庶民の暮らしや思想を知ることができる。

民話は現代に生きる私たちに対する戒めにも聞こえた。民話や伝承を通して、その土地に生きる人々が大切にしてきたものを感じられる貴重な体験であった。それと同時にかけがえのない故郷を震災により失うことの重大さを思い知った。

今回のプロジェクトは非常に充実したものであった。初めて訪れる私たちを笑顔で受け入れて下さる現地の方々と触れ合うたびに立命館大学と宮古市との間に築き上げられた信頼関係を感じた。

3日間を通して宮古市で得た多くの経験を糧に被災と復興の証人として、私自身の仕事にいかしていけたらと思う。

最後に宮古でのプロジェクトに参加してくださった方々に心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト2018 in 宮古」に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 宮治 芳行

今回、震災から復興に向けた現在の宮古市の人々の生活やインフラストラクチャーの様子を実際に見て、地域の方と関わり、時間の経過を感じ取ることを意識しながら宮古市を訪れた。

イーストピアみやこ市民交流センターにて若竹会 SKIP の職員と「アートで遊ぼう」に参加した。子どもたちと一緒に作業する中で、「この子たちは震災後の宮古市で生まれたんだな」と思うと、この上なく尊く感じた。

「支援者支援セミナー」では家族造形法を用いての事例検討会が行われた。若竹会 SKIP の職員と児童相談所の職員との協働である。

家族造形法のメリットは準備が不要なことと、体を使って体で感じ、参加者全員で視覚的に考えられることである。また家族をシステムとしてみる視点を養うことができる。

事例検討の感想としては、担当のキーパーソンだけでなく、全ての登場人物の視点でそれぞれ主観的な意見を聞くことができた。また机上の事例検討と違い優先順位が低い登場人物の立場からの考えも参加者全員で共有することができ、より良いアプローチを導くことができると考えられた。

宮古観光文化交流協会による「学ぶ防災ツアー」に参加した。田老の観光ホテルは国の復興交付金を利用し、震災遺構として保存されている。震災当時は、チェックイ

ン前ということもあり、客は不在、従業員も帰宅したので社長さん 1 人であった。津波は 6 階建ての 4 階まで達したため、1 階と 2 階は骨組みだけが残っていた。ホテルの階段を上がっていくと、鉄製の手すりが異様な曲がり方をしていた。非常に強い外力を加えられたことがわかる。6 階の部屋では窓から見える風景と社長さんが撮影した津波の映像を比較することで当時の津波を疑似体験できた。映像では、津波が接近しているのにも関わらず、防潮堤の近くに消防車や歩行者が映っていた。防潮堤により海の様子は見えていなかったのだ。住民たちも、まさか津波が防潮堤を超えるとは思わなかったと話されていたそうだ。防潮堤を超えて津波がホテルに向かってくるとともに、津波の音が恐ろしく大きいことに驚いた。防潮堤を超えるとわずか 8 秒、車や家は一瞬で津波の中、生々しい自然の恐怖を感じた。

ツアーガイドの S さんは被災後、3 つのことを学んだと言われた。1 つ目は自分はたぶん大丈夫と思い込んでしまう「正常化への偏見」、2 つ目は周りもまだ逃げてない、周りに合わせて行動していればよいと率先して行動しない「集団同調バイアス」、3 つ目はテレビ、ラジオ、警報から流れる専門家の意見や判断を鵜呑みにしてしまう「エキスパートエラー」である。この 3 つの集団心理は、被災していない地域の私たちも知っておくべき知識だと思った。また S さん自身は携帯電話の警報が鳴りすぎて、慣れてしまっていたことが怖いと話された。これは、携帯電話をお持ちの方なら誰もが経験していることであり、今後も注意喚起程度の効果しかないと考えられた。S さんは 2 つ目の集団同調バイアスに流されない「率先避難者」をこの「学ぶ防災ツアー」で増やすことを目的に頑張っているとのことである。このツアーを継続することで S さんを含めたツアーガイドさんは自身の戒めとしているのではないかと思った。レジリエンスの高い S さんはもう既に未来に目を向けておられる。

次に O さんの日本民話の語りを聴きに行くため車で遠野市へ向かった。車の窓から見える遠野市は遠野物語の舞台であり、のどかな田舎町であった。O さんの庭の前には「おでんせ」と書かれた看板が立っていた。「おでんせ」とは盛岡弁で「おいでください」という敬語だそうだ。茅葺屋根の家の中で、火の灯った囲炉裏を囲み、O さんの語りを聴いた。O さんの語りは、遠野言葉と言われる独特の話し方であったため、物語の時代にタイムスリップしたような不思議な感覚であった。

語って頂いた民話は自らを律することや現代でも応用できる考え方が含まれていた。また、少し怖い内容や笑える内容であったので、大人から子どもまで楽しみながら学ぶことができると感じた。O さんの語りにより被災していない私たちにも、これからの人生に立ち向かう力と呼び起こすヒントを頂いたように感じた。

宮古市を訪れて 3 日間、たくさんの方と出会った。現地のプログラムのスタッフだけでなく、タクシーの運転手さんや道で偶然に出会った住人さんからもお話を聞くことができたことは非常に幸運なことであった。

現在、震災から 7 年が経っているが、まだまだ津波の爪痕は残っている。悲しみを

抱えながらも発展期の宮古市はこれからの未来を見据えて前進している印象であった。

援助の方法は様々あるが、震災を通して証人になり後世に伝えていくことは非常に重要な援助であることを理解できた。人と繋がることの第一歩は対面でお話を伺うことである。東日本家族応援プロジェクトに参加する意義はここにあった。今回のプロジェクトで有意義な時間を過ごさせて頂いたことに、心より感謝します。

東日本家族応援プロジェクトに参加して

対人援助学領域 M1 内田信之介

今回、東日本家族応援プロジェクトに参加し、過去にあった東日本大震災からの復興を記録として学ぶのではなく、実際に現地の人から話を聞くことにより、ひとつの経験として学ぶことができました。

初日目では始発の新幹線に乗り、約6時間をかけて宮古駅へと到着しました。同県内であっても盛岡からの移動時間はかなり長く、宮古までの遠さを存分に実感しました。宮古に到着してから魚采市場や浄土ヶ浜、イーストピア宮古といった名所を巡り、晚餐には非常に美味しい海鮮寿司をいただきました。初日目で一番印象的であったのは、現地のタクシーの運転手の方の話でした。この方は東日本大震災の当日も宮古でタクシーを運転しており、資料からでは伝えられないであろう、貴重なお話を伺うことができました。

二日目は、障がい者支援団体に所属されている方々とともに、様々なプロジェクトに参加しました。漫画展やトーク、アートを利用した遊び、歌遊びや紙芝居は多くの人を笑顔にっていて、非常に元気がもらえるプロジェクトでした。支援者セミナーでは、家族造形法を初めて経験し、多くの刺激を受けました。プロジェクトが一通り終了すると、宮古市企画部復興推進課に所属している方から、震災当時から復興にかけての体験談を伺いました。この話には、想像し難いような経験が多く含まれていて、どれほどの困難を乗り越えて現在の宮古があるのかということについて、深く考えることができました。

三日目は、田老にて学ぶ防災ツアーに参加しました。防潮堤や田老観光ホテルへ足を運びながら、ガイド方から様々な話を伺い、防潮堤の意味や津波の恐ろしさについて改めて学ぶことができました。続いて大槌町へと移動し、再びツアーに参加して様々な場所を巡り、ガイドの方から多くの話を伺いました。ここまで多くの震災当時の話を伺い、想像でしか考えられない震災当時のイメージをかなり明確なものにすることができました。続いて遠野に訪れ、伝承民話を語っていただきました。聞いていると引き込まれていくような語りで、あっという間に時間が過ぎてしまいました。非常にわくわくした気持ちで有意義な時間を過ごすことができました。

三日間宮古を訪れ、震災や津波、復興や支援のあり方について多くのことを学び、深く考察を進めることができました。しかし、私が印象的に残っているのは、多くの方が述べていた「来てくれてありがとう」という言葉でした。自分は支援者として満足な活動もできておらず、多くのことを学ばせていただき、お礼を言わなければならないのは自分だと感じました。プロジェクトを通じて知り合った現地の方々の力になれるように、宮古を訪れ現地で学んだことを、少しでも多くの人に知ってもらいたいと考えています。

最後に、三日間のプロジェクトで携わった方々に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

東日本家族応援プロジェクト・2018 宮古

対人援助 M1 楊 梓

2018 年 11 月 2 日－4 日に東日本家族応援プロジェクト（2018 宮古）に参加し、泣いたり笑ったり、非常に充実した 3 日間を皆さんと一緒に過ごしました。3 日間、たくさんなことが心に響いています。

1. 防災意識

「防災意識が薄い方が避難に行かずに津波でなくなりました。」という事例を 3 日間たくさん聞きました。特に田老観光ホテルで見た当時の津波の動画はとても衝撃的でした。

心がショックの状態で宮古を出発して、次の日の授業を迎えました。大学に来て 10 時頃に、12 時から防災演習があるというアナウンスが流されました。大学が防災演習をすることはとてもいい教育と災害に対する心掛けのリマインドだと思います。しかし、演習の様子はのんびりしたものでした。実際に体で体験しないと演習の意味はなくなると思います。私は今回のプロジェクトに参加していなければ、皆さんと同じような行動を取るかもしれません。改めてプロジェクトの意義を感じました。それに、防災意識の強化と防災演習の改善などの課題もこれから考えなければならないと思います。

2. 故郷-ここに住んでいる理由

事前調査で、宮古は歴史上に災害が非常に多い町だと分かって、なぜ地元の方々はここに住んでいるだろうと疑問を持ちました。特に家が津波に流されても、相対的に安全な地域に引っ越さずに、またこの土地で家を建てたということは一体なぜでしょうか。

疑問を持って、「ここに住んでいる理由」を地元の方々に聞きました。

まずは、災害で他の地域に引っ越した方もたくさんいると分かりました。

理由をまとめてみると、

- ① 長男の方が多かったです。3人の男性に聞いて、3人とも長男だからという理由がありました。兄弟たちはほとんど他の地域に住んでいるが、家を継ぐ、両親を世話するなどは長男としての自分がやるべきことだと思って、引っ越すなどは思わなかったそうです。
- ② 仕事の関係。仕事はずっとここだからという答えがありました。仕事の関係で隣の町から来た方もいました。
- ③ 文化の伝承。最初は考えていないですが、生きながらやはり宮古の文化を伝承していきたいですとおっしゃった方もいました。
- ④ 宮古生まれ宮古育ち。ご先祖のお墓は全部宮古で、宮古生まれ育ちの方がほとんどでした。「やっぱりここが家」という答えがありました。

様々な理由があったが、団先生の故郷を語る漫画を読んで、やはり故郷だからこそ、理由なんていらないではないかと思うようになりました。

3. 遠野物語

遠野の風景はとても美しいで、まるで絵本、物語の世界でした。茅葺の古民家に、囲炉裏を囲んで、さっぱりした軽食を頂きました。薄い煙に囲まれながら、穏やかな大平悦子さんが遠野弁で遠野物語を語ってくださいました。「どんと晴れ」という物語最後の言葉は印象に残って、「お終い」という意味だと思いましたが、調べたら「めでたし、めでたし」という意味でした。

今回のプロジェクトに参加してよかったです。お世話になった皆様に感謝の気持ちで心が一杯です。もし来年も参加できたら、中国文化紹介をしたいです。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 宮古」に参加して

対人援助学領域 M1 春田広子

11月2日（金）

始発の新幹線に飛び乗り、宮古市駅に到着したのは13時半頃だった。まずは漫画展のある魚菜市場へ足を運ぶ。秋は豊漁の季節だと誇らしげに教えてくれた店員さん。生たらの刺身、たこ刺、カキフライ、イカめかぶ、など魚介に偏った遅めの昼食を頂く。この土地の素晴らしい力。こんなにも心を満たす食文化がここにある。浄土ヶ浜まで行く途中のタクシーの運転手さんが積極的に語ってくれた。語り部だけが、語り部で

はない。生活者のエピソードも貴重なお話。

11月3日（土）

漫画トークでは、近くに座ったご夫妻が声をあげて笑う姿に逆に元気を頂いた。普段は気に留めないことを感じようとするだけで、人は自分で元気になることができる。

「アートで遊ぼう」「ふるさとの歌や物語を楽しもう」も皆さん自由で活気がある。私はスタッフとして思うほど動けてない。ボランティアって難しい。支援者セミナーではそれぞれの視点に立つ訓練にもなる技法、家族造形法を初実践。自分の視野の狭いこと狭いこと。視線の重さ、場の冷たさなど、五感を研ぎ澄ますことは机上では学ぶことは難しい。

11月4日（日）

田老学ぶ防災に参加。「震災は人をとっても傷つける。」現場でこの言葉を聞くことの重み。防災教育に語り部は必須だ。語り部の継承活動も重要。大槌町の語り部ツアーでは「くよくよする暇がなかった。」との言葉が印象的。車窓から紅葉狩りをしながら遠野市大平氏宅へ向かった。「けいらん」など食のおもてなしにより豊かな食文化を再び体感。大平氏の民話伝承の語りが始まる。遠野物語 97 番は原文も紹介してくださる。生と死を包括的に見ることが出来れば、時間や世界の捉え方が 180 度変わる不思議な感覚におそわれる。分かることが当たり前の日常から距離を置き、頭をひねって思考する時間というのはとても贅沢だ。

3 日間のプロジェクトを通じて

「地域のレジリエンス」はそこにあった。私たちを通じてすでにある地の力を再現して頂くことがこのプロジェクトのひとつの意義だと感じた。私たちが関心をもって現地に入ること、そのことが現地の人たち自身の抱えていることをフッと相対化することに一役かっている様子。復興とは生活の中にあるので完成がないし、必ずしも報われないからこそ、日常的に抱えていく覚悟も必要だ。抱えている人たちには何気ないことが問いとして降りかかる。降りかかるものに反応できる日もあれば、気づかずに過ぎる時もある。漫画展が降りかかり続けて 8 年経った。私は 9 年目以降何ができるだろう、この問いを私自身抱えていきたいと思う。

最後に宮古市で協力して下さった皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 宮古」に参加して

人間科学研究科 博士後期課程 張亦瑾

2017 年も東日本大震災のことをもっと知りたいので実際に東北へ行った。その時私は「短期滞在」の資格を持っている外国人として、JR PASS を買ったので新幹線は乗り

放題で、多数の都市を訪問できたその過程では時々、この都市と前の都市の違いが感じられなかった。どこでもきれいで、広く、市民が一生懸命に震災から復興したが、地元の住民はどのように協力したかなぜその暮らす方法を選んだか、外国人としては理解できなかった。

2018 年は研究科を通して、先生方と岩手県の方と同級生の河野さんと博士前期の友達が世話してくださり、私が地元の事情を認識できるようになったので、心からありがたと思った。11/1 に仙台に着いてから、私と河野さんは石巻の「いしのまき元気いちば」という場所で地元の豊かな農産物と海産物を食べ、大地の力を感じた。それから情報資料館で石巻の被災状況を紹介してもらったさらに、避難指示がよくなく、児童と教職員 84 人が犠牲となった大川小学校へ行き、悲しさを強く感じた。線香はまだ慰霊碑の前に供えてあった。旧校舎はまだ津波に襲われたまま形で、全体を震災遺構として保存することとなった。しかし、遺族の間には「遺跡を見たくない」「遺跡を保存したい」という声が両方ある一方で、近くには再建住宅が多いが、小学校の周りには住宅が全然ないので、この悲劇は地元にとって大変つらい事件だと感じた。また、私たちは南三陸の商店街で撮影展を見、地元が今までどうやって復興できたかという過程を紹介してもらった写真館の店主の佐藤さんは詳しく津波で避難してから今までの南三陸を記録した。何回も津波の資料を見たが、映像と共に地元が津波にのみ込まれる過程を思い返し、私はまた涙が出た。写真に佐藤さんは自分の感想「避難の時見た南三陸。このとき私はこの故郷がもうすぐ終わることを知らない」「津波が防潮堤を越えた。目の前で一体何が起こったか、私は全然わからなくなった」と書いてあったので、当時の雰囲気も感じられた。また仮設住宅で暮らす写真や学校の卒業式という写真も、人々のつながりを伝えていて、地元の力がよく感じられた。

11/2 の朝、私と河野さんが大槌町の「風の電話」へ行った。留学の前から、私はドキュメンタリーフィルムでその場所の事情を知っていたが、実際に訪問したら自分も癒された。樹木と草花に囲まれた庭に白の電話ボックスが設置してあり、森の図書館という二階建て建築にも数多くの絵本があった。暖かい雰囲気の中、人々は自分のペースで想いをまとめ、電話で伝えた。話しても絶対に心の負担が軽くなかったが、人々は自分のペースや選択を尊敬することが重要だと感じた。私も一回電話したら、「あ！想像以上に難しい！」と気づいた。心に言いたい事が多くあったが、私は声が全然出なく、必死にやっても「会いたいなあ」としか言えなかった。私たちは佐々木さんにお宅に誘っていただき、「風の電話」の歴史を紹介してもらい、悲しさだけではなく、場所にある力を感じた。それと同時に、私も面接室で行う相談や心理治療の知識以外、何か悩みを持っている人に対して優しく応援しているかどうかと考えさせられた。

昼に博士前期の学生と合流し、私たち 7 人のグループは宮古市を理解し始めた。静かな道にはほぼ人がいなく、とても小さい町だった。まずは魚菜市场とイーストピア

で漫画展と活動会場を確認してから、私たちは市立図書館と浄土ヶ浜へ行った。市立図書館の蔵書がやや少なく、災害についての図書が特に少ないことに気づいた。時間が遅くなり、辺りが見えなくなったが、私たちは浄土ヶ浜へ向かい、その時に運転手の経験を聞かせてもらった。夜に先生方に会い、翌日のイベントの内容を話していたら、プログラムの開催がもっと楽しみになった。

11/3 の朝、私たち立命館大学からの 11 人が一緒にイーストピアへ行き、地元の大変重要な協力団体「若竹会」と合流した。自己紹介の時に全員の名前や経歴などを聞いたが、私は連携者間の関係をやや理解できなかった。なので打ち合わせでもらった指示を守ることだけに集中し参加した。漫画トークに関する団先生の講座はとてもおもしろかったが、参加者が少なくて残念だと感じた。先生の話は人々の生活に役に立ちそうだが、「漫画トーク」というタイトルは知らない人にとっては内容を想像しづらかっただろう。アートで遊ぼうを開催し、親子と若竹会が支援する障害者の方が来てくださり、楽しい雰囲気になった。歌と手作り紙芝居の時間もそのように暖かい雰囲気で後には支援者支援セミナーが登場した。知らない対人援助者の前で自分の事例を討論することは提供者にとって疲れるものだったかもしれない。小さい地域での事例検討ではクライアントさんの個人情報守秘義務を保持しにくいので、家族造形法を行うことが良いと思った。プログラムが終わった時、私達は市役所の斉藤さんの経験を話していただき、復興の力強さも辛さも感じた。懇親会には反省の討論もあったが、若竹会のスタッフと交流したことの方がずっと感動した。新聞やインターネットでも東北の復興の情報があつた、地元の人々が体験した復興こそが真実だと考えた。

11/4 の朝、私たちは田老へフィールドワークに行った。ガイドの佐々木さんは元気に防潮堤から地元の経験を紹介したが、私は彼女の制服に大きく「未来」という文字が書かれていたことが目に焼き付き、「津波に辛い経験をしたが、田老の住民は真剣に未来を目指している」と感じた。歴史上何回も津波を体験したので、田老には防潮堤や避難階段のような防災施設を大切にし、人々も防災意識も強く自分の故郷の復興をあきらめたくなかったのだろう。いそいで昼ご飯を食べ、私たちは大槌町と遠野の大平様宅へ行った。遠野弁がわからなかったが、私はその環境で再度地元の文化の豊かさを感じた。翌日大阪へ帰る前に、知り合いの仙台の震災遺構スタッフに会い、「東北で被災した地域は広がったが、各地域の復興経験と文化や自然資産は全然違う」と考えた。

事前調査でも事実を知ることができたが、実際に岩手県に着いたら地元とのつながりが感じられ、私はプロジェクトを通して、初めて研究科とのつながりができた。先生方と岩手県の方と河野さんと博士前期の友達へもありがたいと伝えたい。また来年！

「東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 宮古」に参加して

人間科学研究科 博士後期課程 河野暁子

はじめに

私は現在岩手県沿岸で暮らしている。元々は別の地域の人間であったが、東日本大震災で岩手県へ支援活動に入った縁から居を移し、現在は大学院生として東北沿岸を研究フィールドとしている。宮古市田老は震災後の支援活動で入った地域である。同じ岩手県内とはいえ、私の暮らす地域から宮古市は遠く、なかなか訪れる機会がないまま月日が過ぎていっていた。今回宮古プロジェクトへの参加を決めたのは、以前関わりのあった宮古市のその後について学んでみたいと思ったからである。

宮古市フィールドワーク

11月2日の午後に大学院生6名でフィールドワークを実施した。行程は魚菜市场、イーストピアみやこ、宮古市立図書館、浄土ヶ浜である。

今年の10月にオープンしたばかりのイーストピアみやこは市本庁舎や保健センターが入っている複合施設で、防災プラザがある。ここでは、東日本大震災当時の被害状況や災害時に役に立つことなどが、映像や展示資料を通じて学べるようになっている。市民誰もが訪れる市本庁舎と同じ建物にこのような防災プラザがあることで、30年経っても、50年経っても、東日本大震災は語り継がれることになるのだろうと想像した。

タクシーで浄土ヶ浜へ向かう車中、宮古港に建設中の防潮堤を見て、運転手さんは「ここには元々防潮堤はなかった。海と陸とが同じ高さだったから、みんな津波が怖くてすぐ逃げた。だから家は流されたけど、人は亡くならなかった」と教えてくれた。この方のご自宅も全壊だったそうである。私たちが彼の話に興味深く聴いていると、「私のことを聞いてくれてありがとう」とおっしゃったことがとても印象的であった。こちらこそ、大切なお話を聴かせていただき、感謝している。

東日本・家族応援プロジェクト

11月3日は宮古市の障がい者支援団体スキップさんの主催のもと、一日盛りだくさんなプロジェクトが開催された。漫画トークに始まり、アートで遊ぼう、支援者支援セミナーとあっという間に一日が終わった。お忙しい中ご準備を進めてくださったスキップさんに頭が下がる思いがした。スタッフも参加者の方々もとても楽しそうで、イーストピアみやこのガラス窓から差し暖かな日差しを感じながら、気持ちが和む時間であった。スタッフの方々とは、夜の交流会などでゆっくり話す機会を得た。ご自身が被災されている方もいて、これまで本当に大変だっただろうなと想像した。私はスタッフの方々とお会いするの初めてであったが、みなさんが村本先生、団先生、鶴

野先生との再会をととても喜んでおられて、年に1回訪ねてくることの意義を感じた。

震災について学ぶ

11月3日に宮古市復興推進課の齋藤さん、11月4日に田老の学ぶ防災ツアーの佐々木さん、大槌町の震災語り部の佐々木さんから、震災当初からの貴重なお話をうかがった。津波からどうやって逃げたか、避難所で毎日とっていたメモ、再建したご自宅の二重ローンなど、どのお話も胸が詰まる思いであった。沿岸に建設されている防潮堤には、「海が見えなくなるから怖い」「津波が来ても逃げる時間を作ってくれる」など、さまざまな考え方があることを知ることができた。そして強く感じたのは、防潮堤を過信せずにとにかく逃げるのが大事だということであった。

遠野にて民話の語りを聴く

11月4日の行程の最後に、遠野市の民話の語り部である大平さんのお宅を訪ねた。囲炉裏を囲みながら、大平さんが遠野弁で語る民話は、どこかで聞いたことのある懐かしさを感じた。沿岸部から離れた遠野で癒されながら、岩手県の沿岸部と山間部のそれぞれの自然の豊かさを感じ、震災当初は沿岸部への支援の拠点地となった遠野の力強さもまた感じた。

おわりに

田老の学ぶ防災ツアーの佐々木さんが、「7年経ってもこうやって来てくれる、忘れないでいてくれることが何より力になる」とおっしゃっていた。災害後の支援・被支援を考えると、被災地の外から来た人間が「支援者」ととらえられがちであるが、震災から7年が経ち、私たちは被災地から多くのことを学ばせていただいている。そして学ぶことは今後も尽きることなく続き、それが他の地域へ伝わることで、次の災害への備えとして蓄積されていくのだろう。

最後に、今回の宮古プロジェクトでお世話になった方々に心より感謝申し上げます。

イーストピア





支援者支援セミナー



フィールドワーク

